

続

## 感情教育 待望論

### その12

# ことばは本来声であった

元玉川大学教授 上原輝男

ただいま、過分なご紹介を受けまして、大変恐縮しております。上原でございます。

これまで、演題をどのようにしたらよいかというご相談を再々受けましたが、日頃私自身が考えている通りのことをお話ししたいと思ひまして、「ことばは 本来 声であった」という題を付けさせていただきました。

私は、「言語障害」とか「難聴」とかそういう面にかけては、専門家ではございませんので、その点、ご了承頂きたいと思ひます。にもかかわらず、図図しくやつてまいりましたのは、この会が、「こころと言葉を育てる親の会」と名乗っておって下さることが、大変私をうれしくさせたことでございます。長年、私が考えておりました「言葉の問題は、それは心の問題なんだ。」ということと相通じるからでございます。

#### 今日の、言葉の問題

今日における小学校、中学校の教育は、どうしても有名大学に直結するような、有名校に子どもを上げたい。それには学力をつけなくちゃならない。そういうことが教育である、こういう考え方が一般的であります。そのために、反面、非行問題その他が騒がれてきておるわけでありませうけれども、それはまた、起るべくして起こっている現象だと言つても、決して過言ではないというふうな思ひがあります。実はそれは、子ども達自身が引き起こそうと思つて起こしているのではなくて、大人がそういうふうな子どもをしむけているから、子どもはどこかで分裂していかねばならない。そういう破綻を来さなければならぬように仕組まれていってしまうということであろうと思ひます。

子どもに責任があるのではなく、大人社会において、どこか欠陥があるからではない

かつていうふうに思ひます。それはやはり教育つていう問題を、技能的に考えようとして過ぎているからではないだろうかと思ひます。そして、その技能の最も基本的な問題として、「人間は、言葉を話す万物の霊長である」という、こういう思ひ上がつた考え方が、どこかであるのではないかつて思ひます。しかし果たして、言葉というものはそういうものだろうかと思ひます。私には早くから考えておりました。

#### 移住者たちの悲しみ

三年程前に、南米・中南米・カナダをも含めまして、外務省の委託を受けてまして、「移住した日本人の移住者の日本語が、どのように世代交代とともに、現在話され、聞かれてるか」そういう調査を一ヶ月間してまいりました。ところが私は、帰ったら土産話に、

むしろ日本人に話さなくちゃいけないことだっていうふうに思いました。それは、「移住者の人達が持っている日本語に対する考え方、これが『本当』である。」っていうことを思いつて帰って来たわけでありました。四面海に囲まれ、土地の上では他国と境界を持っているところとはございまして、日本人は、自分達が独占しているこの日本列島上に住みついている単一民族であります。ですから、この日本列島においては、人間と顔を向き合わせますと、相手は日本語を話すもんだと決めてかかっているわけがあります。ところが、移住者達は、それが常識にはならないわけでありました。そうした環境が違ってしまった時に、果たして日本語というのはどうなるか。もはや現在、南米では、三世、四世の時代にはいつております。そうしますとどういう現象が起こっているかというところ、おじいちゃんと孫とが話ができない。こういう状態が起こっているわけでありました。南米の人達は苦労しまして、移民して、そしてやっと成功して、その間戦争もありました。そして、今やっと生活が整って、本当におじいちゃんおばあちゃん達一世は、ほっと一息ついて孫のお守りでもしようかと思ひ始めた時であります。ところが、孫を膝の上に抱いてみたら、言葉が通じなくなっているというのが現状なんでありました。

この悲しみつついうのは、これは当地におけるその移住した日本人でないとは分らないだろうというふうに思いました。私どもこの日本列島に住みついていてる者達におきましては、自分と自分の孫の一つ世代をとんだ、その言語伝達がもはや行われないうであろうということ、予測したこともありません。しかし、言語環境を別にした所では、日本人はそういう苦しみを持ち始めているというようないことが起きてるわけでありました。

それらのおじいちゃんやおばあちゃん達は、孫の頭をなでて「おおい子だ、いい子だ。」と言ってやりたい。そして、孫に「おじいちゃん、おばあちゃん」っていうふうに懐かれたい。ところが、それが許されない。涙をこぼして言っております。

それと、もう一つ、「日本人が日本語を捨てる時、日本人の勤勉さが失われていくのではないだろうか?」「私達は、私達の心を孫子に伝えたいために、日本語を話させたいんだ。」っていうことを言っております。

しかし、「私達の根は日本人なんだから」と思っている人達は、孫子にどういう教育をしているかというところ、「おまえはこの国の人間だ?」というふうに問いかけます。そうすると、その孫子達の代のその子ども達も、胸を張って移住した国の国名を名のります。この辺は、私は日本人だと思ひました。

あれ程、日本人日本人って言うのに、自分達にはもはや国は移ったんだ、国籍は移ったんだとして、「はい、日本人です。」って言わせない教育をしている。これは、立派だと思ひました。そして、そのくせ子供を膝に抱いた時には、おじいちゃんおばあちゃん達は涙をこぼしている。このことから日本人ってのは何かがよく分かるじゃありませんか。建前と本音っていうことで生き続けているわけなんでありました。特に、外地に出たそういう移住者達は、本当に昔ながらの典型的な日本人が海を渡ったような感じがするわけでありました。

### 言葉と心

そこで、私は皆さん方に言いたいんですが、「言葉は、伝承するんだということ、現代の日本人は忘れかけている。」と申し上げたいのです。国際交流が行われるようになって、人間は、どの言葉を選ぼうとも自由であるというふうに考えたり、早く外国語を学んでおかなければということ、早期外国語学習」を始めてる学校があつたりと、そういう現状になってきております。しかし、私が言いたいます第一番のことは、「言葉は、心と切り離すことができないんだという問題、これを現代の日本人は忘れかけているということ」であります。ともすれば

ば、言葉は人間の技能の一つとして、使いさえすればいいんだというふうに考え始めやすい。最も合理的な言葉話を話そうというふうに考える。相手によく分かるように話しさえすれば、それでいいんだというふうに思ったりしがちである。そして、正しく話しさえすれば、それでいいんだというふうに考えるようになる。いつの間にか、NHKの日本語が最も日本でいい言葉なんだというふうに、どっかで錯覚し始める。民放の人達は、あ、やっぱりあのアナウンサーだから、ああいうしゃべり方をするということが感じ取られて、非常に身近に思える。ところが、NHKのアナウンサーのほうは、言語明瞭であるけれども親しみが湧かない。何か、お役人がしゃべっているような感じがすると。

### 親の願いと教育

先程もどなたか仰っていましたけれども、人間というものは、神様に近づくこともできるけれども、悪魔になってしまうこともできる、そういうのが人間であります。

私共の本当に理想とするところは、神様のお手伝いをしているのではないかっていうふうに思うわけであります。決して、生意気なことをやってはならない。人間の知恵に頼りすぎたようなことをやったら、必ず子どもを

無理な方向へ引きずっていつてしまおう。こんなふうに思うわけであります。昔から親達はみんな、子どもに十分な教育をつけてやりたいと、こう思ってきたに違いありません。それが、親心であろうと思うわけであります。しかし、間違っているのは、今日親が子に対して教育をつけてやろうと思うのは、それは、「学力」であります。これが「教育」だと思っております。この辺が、もうすでに狂い始めた証拠ではないかっていうふうに思うんです。

今は、学校を出すことが、何か親がしてやらなければならないような考え方になってきております。学校教育は、百年の歴史をもっておりまして。しかし、この百年は、全てが成功しているとはいえないんであります。これは、間違っていないんです。学校教育が、人間に果たしてきた成果というのは、全部が全部、正しかったとは言えないんであります。私は、「功罪相半ばする」くらいに思っております。何故か、その一番大きな点は、「教育は、学校が担当するんだ」というふうに、日本国民に思わせた点であります。これが、まず私は、まずかった点ではないかって思うんです。やはり我々が、人間が人間の子において、親達が子において励まさなければならぬ教育の問題は、やっぱり「心」だったということでありまして。「心を育てること」

だっていうことであります。学力をつけることによって、その人間がだめになるような学問だったなら、しない方がましなんです。進学校受験準備をすることによって、人間が狂っていくんだったら、それは、やめた方がほうがいいんであります。最近、新聞紙上で出ているのは、みんなそれらの欠陥が出ていると、いいいいじゃありませんか。実際、その当事者達にしてみれば、自分達の教育が間違っていたとはつきり言っているではありませんか。そして一番大事なのは、「何ができないか。そして、心の素直な子どもであってくれれば。」というのが、親の願いだったのではないのでしょうか。私の友人、竹馬の友ですが、これも大学の先生をしています。「私の母の言葉」っていう作文を書いてくれました。私は、そういうものを集めているんですが、けれども、私の友人の言葉が一番強烈なんです。その母は、「人と競争するような恥ずかしいこと醜いこと、それだけはしないであれ。」って言って、その子を育てたそうであります。本人は、今はもう大学の先生になっておりますから、「おふくろが、そういうふうに俺を育てたから、俺はこれくらいにしかなれなかった。もう少し競争しろと言っていたら、俺ももう少し偉くなっていたかもな。」なんて言って、冗談言っておりますけれども、やはりその母の教えの素晴らしさが、今

になってしみじみ分かるという歳になったわけであります。ところが今日は、「人を押しつける」のけても、お前は立派になれ。」というようなことを、ともすれば、やりがちであるということでもあります。「心豊かな人間に育てあげる」ということが、どれ程、大事なことからかっているのは、これは歳がくれば、大体、分かってくることはないかというふうに思うわけです。

## 「うみ」という言葉

今日は、特に言葉の問題でお招き頂いたわけであります。先日、角川書店の『古語大辞典』という古い言葉を集めました大辞典が出まして、その紹介が新聞に出ておりました。この『古語大辞典』を紹介するなかに、他の辞典と違うことが出ておりました。例えば、「海（うみ）」の項には、この「う」は、「うのはら」「うしお」の「う」と同じである。この「う」は海洋を表す語基である。こういう辞典は確かに初めてであります。「み」は「水」を表す語基である。このように、一部分が紹介されておりました。私が今、何故この新聞記事を持ち出したかと申しますと、学者達が、言語学的に文字の一字一字について、その音の一拍一拍について、それが何を表すかというのを、早くから明らか

にしたいと思っていることであります。「海」という言葉をとってみても、この「う」という音は、海洋を表す語基であり、「み」は水を表す語基であるというようなことが、や々と辞書に書き表されるようになってきたわけであります。「語基」という、この学術用語も大変まだ不確かなものではあるんですが、何か基本的なものの程度にうけとめられて下さって結構だと思えます。

けれども、我々は、知らず知らずのうちに、「う」の音に海を感じ取り、「み」の音に水を感じ取ってきたというほうが正しいんではありません。つまり、人間の音声は、出る音それぞれに自分の感じ方をまとめていったわけであります。日本人の感覚配当を、我々の音声に配分していったと言ってもいいわけであります。分かりやすく言うならば、これが「基」であります。

私は、こういうことを専門にしている学者でもありませんので、この辺で、遠慮しておきますけれども、私自身が、はっと思ったことがあります。それは、日本人がもっている「うみ」という音でもって「海」を感じている。この一番基本的な感じ方自体に関してであります。それは、戦争の話になりますけれども、終戦後『戦没学生の手記』というのが出たことがあります。戦争に学徒動員されていて、その学生達が、最期に書き残してい

た遺書を集めて出版され、それに『きけ わだつみのこえ』という書名が付けられました。「わだつみ」というのは、辞書でひきますと、「わたのような海」というふうには、現代語訳されるのが普通であります。

ところが、植物における「綿」、これをも「わた」と言いますが、私の感じ方では、『きけ わだつみのこえ』の「わた」は、これは、決して「あのふわふわした柔らかいふんのような海」なんていうことでは絶対ありえないというふうには、思ったわけであります。だとすると、その「わた」は何だろうか。それは、「はらわた」の「わた」だと言えればいいんだって思った時があります。海が黒黒と、「はらわた」のように見える時があります。あの力強さがなければ、「わたうみのこえ」「きけ、わだつみのこえ」なんて言ってみても、戦没学生の遺書は浮かばれないというふうには、直感的に思ったことがあります。そんなことを、私はぼつぼつ考えるようになります。さらに、発見したことがあります。

「そうだった、日本人の『うみ』は、これだった。」って思ったのがありました。何故、あの「化膿」を、我々は「うみが出る」というような言い方をするんだろうかというところであります。

明治の小学校教育の第一の目標は、「文盲

を無くそう」としたところにあつたわけです。文字が読めない人を無くそうという、近代国家に早くなつていかなきゃならないというんで、日本人の家庭の子ども達を学校に預け、早く文字を教え込もうとした。そのために、我々の頭の中では、元来日本人は、あの大海原の「海」をみることに、自分にできた「おでき」の「膿み」をみることは、同じ感覚で見えたのにですよ、文字教育が災いをしてしまったために、「さんずいの海（うみ）」と「にくづきの『膿み』（うみ）」と、「こちらはこちら」なんていうふうに、ちつともつながりをもたなくなつてしまつたのではないかなというふうに思うわけです。これも知的教育を受けすぎた欠陥だということなんです。

また、さらに私は、日本人の「うみ」というのは、「産み」と同じ考え方でよかつたのではないだろうかというふうに、思つたわけであります。「ものが、産み生（な）さる」内側から内部的な生命が外へ吹き出してくる。それが、「うみ」であります。だから、同じようにおできが中から吹き出してくる。それを「膿み（うみ）」といい、あの一面、静かなように思える海原も、何か、内部の生命を感じ取るということにおいて、「うみ」という言葉を産みなしているのではないかと思うわけであります。

さらに、もっと最近になつてから、「この話は、まだ続く」と考えた点があります。それは、何故人が息絶ええると、地中に葬ることをもつて、「うみ」と言うんだろうかということでもあります。土中に埋めることを、何故「うずむ、うずめる、うめてしまふ」と言うんでしょう。「うめる」という言葉が、何故こんな所にくつつくんだろうかと思つたわけがあります。それは、遺体を「うみ返す」とにあるわけであります。人間がこの地上から産まれて、そして地下に帰り、そして、より大きな生命力に包まれて、もう一度また復活してくるという考え方を、日本人が基本的にもつていなければ、こういう言葉はうまれなかつたであらうというふうに考えられることであります。

### 円いもの・結んだもの

漢字というのは非常に便利なものなんです。漢字があつて、それに音を付与したわけではありません。我々が、もともと「音」をもつていまして、それを中国の文字を借りて、それに当て込んでいってわけでありま

す。「漢字は全て当て字だ」と考えるほうが正しいんです。日本人にしてみれば、日本人のその感覚音に、中国の知的文字をあてがつていったわけであります。例えば、

「やまとだましひ」って言います。「やまとだましひ」の一番下の「ひ」は、或いは「み」であるかもわからない。寝間着の紐が結ばれたりします。偶然に、「たまつころ」が出来たりします。そうすると、少なくとも、私が知っている上方方面では、大変に喜びます。「あつ、お金が入るよ、きつと。」っていうふうに、「たまつころ」ができることをもつて、自然に寝間着の紐が結ばれていく。「結ばれる」ことを「縁起良し」とするわけであります。出雲の社は、縁結びの神様であります。これは、日本人が「結ぶ」ということに、特別な感じを委ねるわけであります。「万葉集」の防人の歌なんかにも「あなたの下紐を私が結んであげたんだ。この玉結びを、絶対に他の女性にほどかしてはいかんよ。」というような歌があります。「切れた時には、自分の手で、この私がつけておきます針で、またつないで下さい。」というような歌もあります。このように、「たま」「結ぶ」ということに、特別な感覚を日本人は持っているのです。

円い円を描きますと、日本人は、大変喜びわけです。好きなんです。この円いものを見ると、我々の感覚は中心を考えている。これは学校で、数学、幾何を習つたから、円と中心なんて考えてくるようになったわけではなくて、我々自体の感覚がそうなっているわ

けです。「鉄砲の弾」なんていうのもですね、それは丸い物である。そして、それは「たま」は「命」であるというふうに考えているからであります。

日本人は、こういう円いもの、それを表す結んだもの、そして実をつくったもの、こういうものを大事にする感覚をもっております。

握手っていうのは、これも「手を結ぶ」であります、一人で手を結ぶことが日本人はできるわけです。そして、この教育は、学校教育以前において、もう行っていたわけがあります。「むすんで ひらいて」って、早くから、日本人のこうした感覚教育を、実はやっているんです。無意識でさせていくわけがあります。結んでいるわけです。これが「結び」なんです。「にぎにぎ」なんです。「おにぎり」なんです。「おにぎり」は、同時に「おむすび」であります。たまの状態を作ったのが、「おむすび」なんです。その「たま」を口の中に入れるから、生命感が湧いてくるというのが民俗学という考え方です。あります。お正月のおもちを食べるのは、丸い物「魂（たましい）」を食べているわけがあります。お宮に参って、手を洗う。あれはただ裸をして、穢れをとっている、きれいにしているだけではありません。あれは、手を結んでいるんです。「水を結ぶ」って言うので

しょ。水をこういう形で汲み上げる。これを「結ぶ」という。このような状態にするのが、実は「結ぶ」なんです。もうこれが円い物をこの中へ入れたっていうことなんです。これが、「結び」であります。

### 音と感覚は一つである

こんなことを考えてきますと、日本人が使っている「音」は、日本人の感覚それぞれに、基本的なものが用意されているということとを、考えざるを得ないわけなのであります。

我々が、大事にしなければいけないのは、ことばの、その音と感覚とは一つだということに考えていかなければなりませんということとです。我々は、言葉にあまり振り回されてはいけませんということをし上げました。何故か。「日本人の言葉観は、実は『ことば』観なんだ」からです。へんな言葉です。文字に書きますと、ことばの「は」は、「こと」ではありませんで、「葉っぱ」なんです。葉っぱ以上の役割を果たしていないっていうことなんです。日本人は、この「こと」のほうを大事にしているんです。本体は、「こと」にあって、そのことをつかまえてさせるものとして葉っぱがある、ということなんです。葉っぱっていうのは、木があっ

て、枝が伸びて、その先につけているのが葉っぱなんです。この感覚でもって、日本人は、「言葉」というものをもっているわけです。「は」という音は、一番先に出ているところなんです。一番早く、目に付くところが「は」というんです。この口の「歯（は）」とそれから、木の「葉（は）」っぱと何も関係がないなんていうふうに、文字教育を通してしまったために分からなくなっていただけなんです。日本人の感覚からいくと、「物の先端」は、全部「は」であつたわけです。『枕草子』の「山の端、少しあかりて」という山の端も、「は」なんです。どういふのか、ハ行音は大体そういうものをもっているようであります。（ハ・ヒ・フ・ヘ・ホ）というのは、どうも「うわべのもの」「中身が外に現れたもの」というような感覚をもっているのではないかという感じがするんです。

一つ、大きな証明をしてみます。人間が笑います。皆さん、笑ってみて下さい。ハ行音で笑ってみて下さい。そんなこと言われなくたって、人間は皆、ハ行音で笑うんですよ。「ハ・ヒ・フ・ヘ・ホ」で笑うんですね。「ハハ ヒヒヒ フフフ ヘヘヘ ホホホ」。これで笑うわけです。「これ以外で笑ってみろ。」と言うと、「アアア カカカ クケケケケケ」というのはあるかもしれませんが、他ではちょっと無理でしょう。「ラ行

音で笑え。」なんて、これ笑えませんよ。「ラ  
ララ リリリ ルルル レレレ」なんて。こ  
れでは笑えない。

皆さん、お宮に参りますと、必ず狒犬さん  
がいますね。あるいは、仁王さんがいらっ  
しゃいますね。あの狒犬は、昔から言われ  
ておりますように、<sup>ッ</sup>あ、<sup>ッ</sup>うん<sup>ッ</sup> という字は  
「阿吽」を表している。片一方は口を開いて  
いる。片一方は口を閉じている。この形を  
とっているって、よく言いますね。一方は、  
<sup>ッ</sup>ア<sup>ッ</sup> という発声をし、片一方は <sup>ッ</sup>ウン<sup>ッ</sup> と  
言っている。これで「人生」を表す。<sup>ッ</sup>ア<sup>ッ</sup>  
で産まれて、<sup>ッ</sup>ウン<sup>ッ</sup> で死んでいく。こうい  
う凄惨な知恵をかつての日本人はもっていたん  
です。<sup>ッ</sup>ア<sup>ッ</sup> で産まれる。<sup>ッ</sup>オギャー<sup>ッ</sup> で産ま  
れるわけであります。<sup>ッ</sup>ギャー<sup>ッ</sup> で産ま  
れるわけですね。というのは、人間の体が  
出てくる時には、<sup>ッ</sup>ギャー<sup>ッ</sup> っていう声で出  
てくるような仕組みをもっているわけです。  
そして、あの世へ逝く時には、「ウン」こう  
なっているわけなんです。

体操の先生は、「深呼吸をしましょう。手  
を大きく挙げて下さい。うんと吸いましよ  
う。サアと吐きましょう」なんて言って、手  
と一緒に使わせる。これに呼吸を合わせる  
と、「吸って吐いて」っていう形になるわけ  
ですね。だから、言葉は、我々の身体の吸っ  
たり吐いたり、この呼吸を使っている運動な

んです。その時に声帯が伴うことによって、  
音に変わってくるわけですね。それに、我々  
の感覚が配当されていくわけです。

### 一音一音に感覚を配当してみる

さあ、そういうふうになると、一音  
一音の感覚配当っていうのを知りたいとお  
思になるだろうと思うんです。少なくとも、  
も、はっきり分かることは、「ハヒフヘホ」  
で笑っています。ということをやったわけ  
です。じゃ、他はどうなっているんだろうか  
という事です。驚きの声っていうのは、これ  
は変えてみようっていうわけにはいきませ  
んね。「あつと驚いた。」っていうのを、他  
の「ラッて驚いた。」なんて、こうはいきま  
すか？ いかないでしょ。「えって驚いた。」っ  
ていうのをですよ。「ルッて驚いた。」こう  
は、いかないんですよ。「言え。」って言っ  
てみたって、言えないんです。だから、「こと  
ばは、本来、声であつた。」って言うんです  
よ。「我々の肉体が出す音を言葉だとして考  
える必要があるんだ。」っていうことなんです。  
特に、今日のような障害児をもつておられる  
おとうさん、おかあさん達に考えてほしいの  
は、自然の音を出させるっていうことを考え  
てほしいということなんです。その子ども達  
が持っている体の、肉体の音を出させる。そ

こから、やる必要があるんじゃないかって、  
素人は考えるということであります。

次に、ア行で驚きをとってみたいと思ひ  
ます。「ア」「エ」「オ」これを基本にしてい  
るように、私は思えてなりません。ア段は、  
「ア・カ・サ・タ・ナ・ハ・マ・ヤ・ラ・ワ」  
これは、驚きの音に変わりやすいわけです。  
例えば、タ行のア段、「タ」ですね。これは、  
結構いけるんです。あんまり、やりませんけ  
れども、「タアー」っていうのは、こりゃい  
けるわけですよ。あるいは、「マ・ミ・ム・  
メ・モ」その一番上の音、これは、「マ」で  
しょ。これなんか、充分ですよ。ね。「マアー」  
なんて、やってるわけですよ。ヤ行もその通  
りですね。「ヤアー」なんてやってるわけ  
です。

ところが、そうはいかないのがあるんです  
よ。ア段で、「サア」なんていうのはどうも。  
「サアー」なんて言って、驚けないっていう  
ことなんです。それから、「ナ」が駄目  
ですね。「ナアー」なんていうのは、こりゃあ、  
ちよつと無理だつていう気がするんです。何  
故そういうことが起こるんだろうかっていう  
ようなことも考えてみると、持ち役があるつ  
ていうか、音の配当が、やっぱりあるような  
気がするんです。一番活動していないのは、  
ラ行音です。「ラ・リ・ル・レ・ロ」なん  
です。ラ行音で始まる言葉は、日本語の中には

ないんですよ。ここが、日本の言葉は感覚音だつて言い得る第一の証拠ですね。単に、機械的にコンピュータで言葉を作っておいて、はい、この言葉、このものを表すには、この言葉でやりましょうって言ったら、ラ行音にだつて配当があつたはずですよ。ところが、日本人は、ラ行音を頭におく言葉は、すでにありません。「そんなことないだろう。」「らつきょう」もあるし、「ラツパ」もあるし、「リング」もあるじゃないか、と仰るかもしれませんけれども、それは全部、外来語であります。ないんですよ。何故かという、「ラリルレロ」を一番先に聞くことは抵抗がある。また、口に出にくくいうことです。今の人だから、「ラツパ」だとか「りんご」だとか、こういう言葉を自由に発音できるかもしれませんけども、昔の日本人は下手くそだったんじゃないでしょうか。そして、大体、聞き取りにくかつたんではないでしょうか。ラ行音から始めることは出来ない。そうすると、このラ行音は、一体何を、どういう役割を果たしているのかっていうことになるんですけれども、実はラ行音は、大変な役割を果たしてくれているんですね。日本の音では頭には来ないけれども、後にくつつけることによって、ものすごい活躍をするんです、もう一つ、先に言っておきますね。先程言ったように、ナ行音はナ行音で

驚きにいかないって言ったでしょ。「ナニヌネノ」なんて、これは驚けないわけですよ。そうすると、このナ行音は、どういうのかっていうことになる、これは、不思議なんです、日本各地、どこにいきましても、ナ行音で一番最後の言葉にしているわけです、日本語は。「そうですね。」「そうだな。」「そうだに。」なんて言つて、必ず、文末にくるのは、このナ行音をとるんです。こんなこと何も親が一番最初に、子どもを教える時に、「ナ行音を最後にしなさい。」なんて、誰も教えていないわけですよ。ところが、ちゃんと語調を整える形において、それが用意されている。それが、我々の体にくつついている言語なんです。日本人の言葉なんだっていうことを、私は言いたいと思います。

さて、先程言ったように、単音に感覚配当が、どうついているのか、こりゃあ誰もが知りたいところです。一つの音に対して、どんな基本的な感覚が配当されているんだろうか。これは、私が全部申し上げて、私が思っている通りだつていうふうになればいいんですけれども、なかなかそうはいかないんですが、先程言いましたように、五十音に、まず実験的に、楽しいですから、誰でもやれることです。やってごらんになりましたらいいんです。ラ行音をくつつけるんですよ。「ラリルレロ」の音を、五十音に一つ一

つくつつけていってごらん下さい。一番簡単なもの、「ア」に「ラ」をくつつける。「アラ」っていうのが出来るわけですよ。で、これは、不思議に、このア段の音は本当に多いですね。くつつけておかしい、それは言葉にならないっていうのはないのです。「アラ」でしょ、「カラ」でしょ、「サラ」でしょ、「タラ」でしょ、「ハラ」でしょ、「ワラ」「イラ」「キラ」「シラ」「チラ」「ヒラ」「ウラ」「クラ」「スラ」「ツラ」「ヌラ」「フラ」「ムラ」「ユラ」ほとんどあるんです。それだけじゃ分かんつて言つたら、繰り返しすればいいんです。「アラアラ」つて言えばいいんです。そうしたらよく分かるんです。「カラ」だけじゃ分かんつて言つたら、「カラカラ」にすればいいんです。何かが「カラカラ」に乾いている、こうなつちゃうんです。あるいは、「サラサラ」している。」もうこれで分かるわけです。

### 言葉の習得の始めは、 感覚を分離すること

だから、私が恐らく考えていることが間違いないければ、子ども達が、まず言葉を習得しようとしている一番最初は、「感覚分離」ではないか、というふうを考えているんです。耳に入ってくるその音を頼りに、その音に対



して、自分の感覚をどんなふうに分離していくか、こういうことを、子ども達は最初、一生懸命になってやっているんだと思うんです。

日本語は、「擬声・擬態語」が世界で一番多い、もう拔群に多い言葉なんです。「擬声・擬態語」。私は、擬声とか擬態という言葉は、ちょっと抵抗があるんですけども、音を頼りにして創り上げた言葉ということ、日本語の一番基礎に据えているっていうふうに考えているんです。日本人は、如何に感覚的であるかっていうことなんです。ところが、五十音、その「アラアラ」っていうのと「カラカラ」っていうのとの違いは、もう本当に子音の違いではないわけですよ。「頭がくらくらした。」「あつ、きらきらお日様、光ってる。」の、「キラキラ・カラカラ、クルクル、クラクラ」なんていうのは、ほんとにわずかな違いですよ。それでも我々は、パッパツと我々の感覚を反応させていかなくちやならないっていうことです。

南米で話をした時に、質問する人がいました。「先生、『やっぱり』って言う人と『やはり』って言う人がいますが、それは、どちらが日本語として正しいんでしょうか」と質問をなさったんですね。ここが日本語の特徴だというのは、*ッ*や*ぱり*と*ッ*や*っぱり*の言葉を一つの言葉として扱い、いわゆる単語

だっというふうに思おうっていう意識が、もう出てきているわけです。ところが、単語だっというふうに思っているから、*ッ*や*ぱり*と*ッ*や*っぱり*とは違うっていうふうに考えてしまうわけです。これは、発音の癖で、*ッ*や*ぱり*が*ッ*や*っぱり*、こちらが詰まったわけですね。促音の形をとったから、*ッ*や*っぱり*になって、次の「は」が「ぱ」に変わっているということなんです。音が変化しただけのことですよ。これは、大体、こんな漢字（矢張り）を当てたりするものだから、れっきとした語だっというふうに思っている証拠なんです。ところが、そうじゃありませんで、これも、*やっぱり*我々の音感覚だけが作り出した言葉なんです。他の言葉を並べてみると分かる。これは入れ替え可能である。*ッ*や*っぱり*、*ッ*さ*っぱり*、*ッ*き*っぱり*。他の*ッ*さ*っぱり*、だとか、*ッ*き*っぱり*、だとかは、擬声・擬態語だと思っている。ところが、*ッ*や*っぱり*だけは、ちゃんとした言葉だなんて思っているから、区別しようとする。そうじゃないんですね。これの違いですよ。*ッ*や*っぱり*って、「や」と言うか「き」と言うか、その違いで我々はパッパツと反応できるんですから。我々が言語能力があるということとは、*ッ*や*っぱり*、我々もこうした感覚の音と感覚との接触あるいは分離を考えてやらなくちやならないんだっというようなこ

とになっていくだろうと思います。

## 「さ」と「き」と「くら」

私は、小学生から剣道をやりました。剣道であまり負けことがない。本当はなかったんですけども、一度負けたんです。それは、名前負けしたんですね、相手の名前に。それは、呼び出しの時です。私は、鳳鳴中学だった。「鳳鳴（ほうめい）」っていうのは、音がこう、強い音が一つもないですよ。「鳳鳴（ほうめい）中学、上原君」って言うわけです。また強い音が一つもないわけです。「鳳鳴中学、上原君」優しい選手が出てくるって感じがするでしょ。ところが、相手が違ったんです。向こうは、「豊岡（とよおか）中学」って言うんですね、「豊岡（とよおか）」って、「か」という音が入っているでしょ。「豊岡中学」。名前が、何と「さっさ君」って言うんですね（笑）。私が見た途端、その音を聞いた途端に「駄目だ、こりゃ勝てない。」と思いました。さっさと負けましたけどもね（笑）。さっさというこういう名字があるんですね。また、このサ行音っていうのは、面白いんです。日本人は、サ行音に神秘感を感じる癖をもっているんです。「サ」っていうのは、「ササ」って言うでしょ。「ささのは さ

らさら」っていう歌があるじゃないですか。「ささ」のは「さらさら。」っていう歌を子ども達に歌わせることによって、「サ」の感覚を植え付けているんです、ちゃんと。「ささ」っていうのは、あの「ささの葉」が、サッサッサッサッというふうに動く音を、日本人は、「笹」と知っているんです。そして、「ささ」っていうのは、神が忍び寄ってくる音だとしているんです。

お酒のことを「ささ」っていうでしょ。御神酒をあがらない神様はありませんね。また、お酒を使わない神様ごとってありませんよね。あれは、証明するわけですよ。アルコールを入れることによって、アルコールだとは知りませんから酔ってくるわけです。そうすると、「神の気がのりうつた」と考えるわけです。だから、神様ごとをしているんですから、アルコールを入れないわけはない。そして、「けがのりうつた」「神のけがのりうつた」「神の気（け）」。これは大事にしなくちゃいけませんよ。「気」を大切にしなくちゃいけない。人間は、全てそうなんですけれども、今、ヨガだとか何かやっています。あれはやっぱり「気」をもとにしているわけですね。何かを感じるようなのが、人間なんです。そして、それを一番感じているところは、これ（毛）です。だから、これに「け」という音を与えているわけです

ね。同時に何か自然界を見て、気を感じるもの、それが「木」なんです。「気」を見せるわけです。あの植物が、気を見せてくれるわけです。何をみせてくれるか、天の気をみせてくれるわけです。日本人はこれに敏感ですから、日常挨拶語にこれを使っているわけです。「お元氣ですか。」って言っているのは、これです。「お元氣ですか。一番元になる気は、大丈夫か。」っていうことを言い合っているわけです。どこの時代から始めたのか知りませんが、「お元氣ですか。」っていうのを、中国人はこんな挨拶、もうしてないんです。最初は、中国の知恵だと思っただけです。最初も、それを日本人が輸入して、これは素晴らしいと思っているから、未だに離さない。もとの中国では、もうこんな挨拶しないわけです。中国では「あなたに天の気がどんなふうに入っていますか、それは、しっかりしていますか。」っていうことを尋ねていたんです。

今、漢字を書きました。上から読んでいただきます。一番最後に、どんな音が残っていますか。「柳（ヤナギ）」「柿（カキ）」「杉（スギ）」「檜（ヒノキ）」「榎（マキ）」これは、木偏がついているだけではありません。日本人がこれを見て感じたのは、気を感じているから「杉（すぎ）」と言い「檜（ヒノキ）」と言っているということなんです。我々はこん

な漢字を使いながら、指摘されないと気がつかない。我々が木に感じようとしたのは、その本当に気を感じようとするためであつたということが証明できるでしょ。「桜は、木って言わないじゃないか、松も言わないじゃないか」って仰るかもしれませんが。でもそれは、「き」ではないんです。「桜（さくら）」は木偏で書きますけども、昔は「二貝の女が木にかかる」って書いたんですね。昔の人は、ちゃんとうまい具合に教えてくれた。今は、どうですか？「普通の女が気にかかる。」なんて。ちよつとわけがわからん、これは。漢字は木偏ですけれども、日本人は、これを「き」と言わなかった。「桜（さくら）」は神木なんです。「神様」特別のものなんです。だから他のとは一緒にしないですね。また、先程の「サ」っていう音が入っているでしょ、そして、その下に「くら」っていうのが入っている。これで分かるんです。「そうか」って思いつく人いませんか？だから、桜の下に行つて日本人は宴会するんです。「花見」なんてやっているんです。あれは、元が分からなくなつたから、花を見に行つていると思つていますが、そうではなくて、「桜の木に集まつていった。」というのは、そこに神様が降りてくると思うから、ご馳走をもつて、お供えに行つたんです。その元が分からなくなつてしまつても、「花見

酒」なんていうようなことになって、同じことをやっているでしょ。花見の下で宴会と同じ形をとるでしょ、ご馳走作っていつて、酔いがまわってくると、「誰か歌え、踊れ。」なんていうようなことになっちゃう。それは、「神様がお出でになっているから、お客様がみえているから、さあ、誰か一つ余興に何かやりなさい。」っていうのと同じ形をとっている。

また、馬の上に載つける「鞍（くら）。」として、あの土蔵の「蔵（くら）」と一緒にのかつていうことになるわけです。くらは、一番大事なものをしまっておくところでしょ。また、「座（くら）」なんていうのは、お座りになる場所ですね。今でも、国会議事堂にいきますと、菊の御紋章のついた椅子がありますよね。今の記者達は、何も知らないもんだから、「天皇の椅子」と言うようになったんですけれども、昔の人達はちゃんと今でも「高見座」って言いますよね。「たかみくら」ですよ。貴きものが位置する場所を「くら」と言うんです。そこは貴き人がいらっしゃる場所である。こういうのが日本人の感覚なんです。だから、「桜」っていうのは、今言っていることが、お分かりになっていただけるだろうと思うんです。

日本人の言語っていうのは、何としても、感覚を音にしたものである。日本人の感覚を

音に変えたら、それが言葉になっているんだという考え方をもたなければならぬ。少なくとも、我々の心象として、心の象徴ですね、心の象徴が、心のシンボル、感覚をシンボリックしたもの、それが言葉だっているふうに、また心象の音声化であるというふうに考えなければ、絶対間違ってくるっていうふうに思っているっていうことなんです。決して、物理音の模写ではないんだっていうことです。子どもに言葉を教える時に、物理音の模写である、あるいは、暗記にだけ頼っているような、言葉を暗記させるような方法をとっては、子どもは苦しむ一方だっていることであります。まだ知恵が発達しかねているわけですから、自然な感覚の伸びに沿って、その心の音声を、心の表れを音として固定していく方法をとらなければならぬだろうということを私は言いたいと思います。

### 三歳児の感覚と言葉

時間がすぎたんですけれども、こんな例があったっていうことを、もうちょっと申し上げたいと思います。私が、英才教育研究所に三年くらい行ったことがあります。一歳九ヶ月の子どもくらいから手がけたんですが、その時に、「つかつか」っていうのと、「すたすた」っていう区別がつかつかないかってい

う実験でいいデータが得られたんです。

こういう実験をしました。こう足型を描いたんですが、矢印を書いて、棒を引っ張って、足跡をこう描いた。もう一つの図面は、これの逆を描いた。線から離れる形の矢印を描いて、足型をまた違えたんです。それで、「つかつか」と「すたすた」とを区別して、「おじさんが『つかつか』って言ったなら、どっちの紙を取ればいいか、『すたすた』って言ったなら、どっちを取ればいいか、取りなさい。」って言ったんです。三歳児でしたよ、これ、ほとんどの子が間違いませんでした。「つかつか」っていうのは、対象に寄っていく音だっているのを聞き分け、「すたすた」っていうのは、対象から離れていく音であるっていうのを区別しているっていうことであります。どうです。私は、言葉を覚えさせるようなんていうふうにしないで、言葉をどんなふうに分離しているのかっていうことを調べることを、当面の仕事としてやったわけです。また、その当時、分かったことですが、子どもをドアのそばに連れていきまして、ノックの真似をさせました。そして、「トントントンってノックして頂戴。」って言ったから、三歳の子どもでも、トントントンってノックしてくれました。今度は、「パンパンってノックして頂戴。」って言ったなら、一瞬迷いましたが、感心しましたよ。パンパンってい

う時には、ちゃんと手を広げて、こう叩きま  
す。どうです。トントンっていう時には、手  
が丸まる。このほうがトントんに近い。パン  
パンって広げた時には、平板にものにあた  
る音であるということ、ちゃんと区別でき  
ているっていいことでもあります。そうして、  
「ト」っていう音と「パ」っていう音との区別、  
そういうものを見極めているっていいこと  
であります。

### お伽噺の大切さ

それから、日本の童話なんか、なるだけ古  
い童話を使って頂きたいと思います。よく  
今、子どものお伽噺とか童話なんというの  
を作るサークルができて、皆さん楽しんで書  
いておられる。楽しみは結構ですけども、そ  
れは、専門家に尋ねられてからにして頂き  
たいと思うんです。あるいは、この童話を聞  
かすということは、どういう役割を果たすこ  
とになっているのかっていうことをよく勉強  
なさってからにして頂きたいというふう  
に思っています。

昔のお伽噺は、良くできているんですね。  
長年長年培ってきた、そして生き残ったもの  
が残っているんです。私が一番素晴らしい  
と思うのは、『おむすびころりん』だと思  
うんですが、あの中には、ちゃんと擬声・擬態語

が用意されているっていいことですね。ま  
ずおむすびが、ころころころころ、ころが  
つていきました。おじいさんは、どんどん  
どん、追っかけていきました。これの繰り返  
しばかりです。ところが、この繰り返して  
いうのが、子ども達が一番楽しいんです  
から。子どもを笑わすなんてわけないん  
です。繰り返してやればいい。子どもの前  
にいて、手をこうやって、これを何回か繰  
り返す。笑うまでやっておりゃいいん  
です。必ず笑いますから。一番簡単な  
のは、「いないいないばあ」なん  
ていうのは、あれはやっぱ、一番  
大事な教育だと思うんです。日本人は、  
太古から「いないいないばあ」を  
やってたんじゃないかと思  
いますよ。「ばあ」っていうのは、  
隠れていたものを現すことなんです  
ね。「ばあ」っていう、この出る  
っていうのを、「ばあ」っていう音  
を合わせる、それをやってるわけ  
です。だから、これは、もう必ず喜  
びますよね。一回で笑わなかつたら、  
二度、三度やればいいんです。

### まると三角とバツ

それから、視覚的なものも気をつけてほ  
しいと思うんです。視覚的なもの。先  
程、言いましたね。「まると三角」を  
みたら、日本人はその

中心が見えてくる。これも育っているわけ  
です。三角は、日本人はあまり意識し  
ないですね。ところが、日本人が意識  
しているなあと感じるもの、それは×  
(ばつ)。これは、すごく日本人の感  
覚にはきつく入ってくるんですね。な  
んで学校の先生っていうのは、答えが  
間違ったら、これを付けるんですか  
ね。合っている時には、○でしょ。違  
っている時には、×でしょ。何で、こ  
ういうのをやってきたんですか。そ  
れは、これを×(ばつ)というから、  
やっているんです。日本人は、×に  
対して、特別な感覚をもっているとい  
うことを知っているから、これを与  
える。しかしこれは、決していけな  
いっていいことではなく、普通に  
使ってはならないことなんです。こ  
の印は、日常生活において、使っ  
てはならないことなんです。そうい  
うことから、○よりも恐ろしい印  
なんです、それがよく分かるのは、  
去年だったか封切られた「二百三  
高地」っていう映画、ご覧になり  
ましたか? 「二百三高地」に向か  
っていく兵隊達っていうのは、何を  
やっていましたか? 白だすき隊とい  
う決死隊っていうのは、全員襷を  
かけるわけです。今日は、お若い方  
が多いんですけども、戦争なんてい  
ったって、ついこの間のことですよ、  
その時に、みんな出て行く兵隊さん  
達は、襷をかけたの

か？　なんで日本人は、あの襷がけで仕事を  
するか？　これは、神様がいらっしやるから  
やっているんです。これをやることによって、  
神に近づくっていう印なんです。だから、  
決死隊がこれをやるっていうのは、「命  
救われますように」っていうことじゃなくて、  
「もはや神に近づく。」っていうことなんです。

私は、奈良の春日神社の宮司さんに、あそ  
この若宮のお祭りを見せていただいた。その  
若宮様の魂をお祭りの時に出されるわけ  
です。その時神主さんがちゃんと白襷をして  
おられるんで、しめた、と思ったんです。そ  
こそ、まさしく占めた！　と思いました。私の  
いうことは絶対正しいっていうことを、見せ  
てもらえたと思ったんです。それは、神様を  
抱かれるんですね。そのために、白襷にし  
て、そして、神様をこうやって抱いていらっ  
しやるんです。奥さん方は今はあまり「襷が  
け」ってしませんけれども、あれは神様に近  
づくっていうことで、これは恐ろしいって  
いうことです。だから、日本人は間違ってい  
たら、これをやったっていうことなんです。  
「ばつ（×）」っていうのは、つまり、「ばち  
があたる」っていうことです。

「ち」っていう音は、日本人は一番恐れた  
音なんです。だからこそ、人間に与えて、人  
間が大きくなるものをなんて言いますか？  
白い液体「乳（ちち）」、赤い液体のほうは？

これが、どんな体から出て行くと、駄目に  
なっちゃう。それに、「血（ち）」っていう  
「音」を与えている。これは、「ばつ」ある  
いは「ばち」「ち」なんです。もつと恐ろし  
いものにもありますよ。日本女性が一番嫌  
いなもの、「へび」。あれがもつと恐ろしくなっ  
てきたら、「おろち」って言うんです。雷様。  
あれを「雷（いかずち）」なんて言った。ま  
た、これを「交叉する」っていうふうにとっ  
ている。違えた所なんです。「間違えた」つ  
ていうのは、「違えた」ところなんです。「違  
えた（血替えた）」「血を交換した」ところで  
あるっていうことなんです。「血を交換した」  
「契りを結ぶ」っていうのは、これなんです。  
「間違う」っていうのは、「血、かう」なん  
です。「血を替えた。」んです。交換したもの  
を、町に出て、お金を出して、「買う」「買  
物をする」っていうのは、「かえる」んです。  
「かう」んです。だから、「交叉する」って  
いうのに、日本人は非常に敏感なんです。「入  
れ違う・食い違う・行き違う・飛び違う・す  
れ違う・取り違う・吐き違う」っていう。日  
本人は、非常にこの「違う」っていう言葉を  
発達させてきているっていうことなんです  
ね。「互い違い」なんて言うでしょ。「互い違  
い（たがいちがい）」って何ですか？　あの  
「たがいちがい」の「た」は、「手」なん  
です。「手を交換する」っていうことなんです。

「向こう」と「こっち」、「たがいちがい」に  
する。「手を交じわう」ことによって、この  
「ち」を交換する。「威力」を交換するとい  
うことなんです。「甲斐の山々」なんてい  
う歌がありますよ。武田信玄の甲斐。「甲斐」つ  
ていうのは、あの「かい」ですよ。「海の中  
の貝」ですよ。「貝」というのは、交叉する  
から「貝」なんです。じゃあ、あの山国が、  
どうして「甲斐（かい）」なのか。今度こっ  
ちへ来る時に、飛行機で飛んできました。そ  
したら、山々が、あのおねりがこう、違っ  
ているんです、山脈が。そういうところを「甲  
斐（かい）」というわけです。

## おわりに

大変時間を超過してまでお話しさせて頂  
きましたが、この「かう」っていう言葉を最後  
に取り出しましたのも、日本語が一番大事に  
している点、日本人が感覚をそれぞれなりに  
育てていて、今、自分の感覚はここまで来  
ている、相手はどこまで来ているかってい  
ようなことを確かめ合った時に、日本人は言  
葉で会話してたんではないかっていうよう  
に思えてなりません。日本人は敏感であつた  
から、それを「出会い」っていうふうに思  
えたんではないか、今日も御縁があつて、皆  
さんとういう話をさせて頂く機会を持てたわ

けですけども、これも、日本人のもつての言語感覚的なところまでおりてきました時に、初めて、今日の出会ひも、素晴らしい出会いだったのではないだろうか、また、上原輝男がもっている感覚というようなものが、皆さんのもつていらつしやる感覚と交叉し始めた時に、「今日の話はいい話であつたとか、つまらなかった。」というふうに仰るんではないかと思うんです。

最後に繰り返になりますが、我々日本人は、「感覚」を「音」に変えたら、それが言葉になつてゐる、という考えを持たなければなりません。また「言葉」は「感覚」をシンボリックしたものであり、「心象を音声化したもの」という考えを持たなければ、言葉の習得において、子どもたちはますます苦しむことになると思う訳であります。

昭和57年7月20日

青森県弘前地区「こころと言葉を育てる親の会」  
主催記念講演

於 弘前市立第二大成小学校

※本稿の講演録の掲載にあたっては、編集部の責任において、小見出しを付けて構成しました。

## 上原輝男先生のことば

※来年（2019年）5月に、新天皇の即位式と大嘗祭が行われるにあたり、『統感情教育論』の著書の中に、大嘗祭と日本人の生命実感について述べている文章がありますのでご紹介いたします。（編集部）

本年（1989年）は日本で、最高の神事が行われることになっていきます。新天皇の即位式と大嘗祭が行われるのです。日本の最高の祭と申すべきものです。このことに触れましたのは、日本人の存在感の根源と深くかわつてゐることだからです。

昭和が去り、平成の世となりましたから、新天皇が即位式を挙げられる。ここまでは、現代人にとりまして、その形を整えられるのだとしてうけとめられましょう。しかし、私たちの祖先の感覚では、その形の中味の方が大事であつたことになりました。それが大嘗祭という神事でありました。ですから、この神事をお済ましになられることによって、天皇の霊能がおつきになったと思つて参りました。

現代人の考えでは、この話のうちの形式は認め、内容は信じられないということではないかと思ひます、そのくせ、形と心といずれが大切かと問われれば、大抵の人は心といひます。もし心が大切だとするならば、信仰の有無にかかわらず自分自身の生命実感そのものの働きを思ふべきです。

大嘗祭は、新天皇が神様に新穀をお供えにな

り、神様とともにお召し上がりになる神事だと伝えられています。私の最大関心事はその形式よりも、私ども祖先のそのことに托したその心情なのです。そのことが日本人の最高の神事たり得たのは、日本人の生命実感をそこに見たからといわねばなりません。

私ども子どもの時には、御飯をこぼすと目がつぶれるとまで言われて育てられるのが一般家庭の躰でありました。米（よね）稲（いね）と呼ぶことの意味も、生命力のことを「よ」「い」の音で捉えているからで、その根元となるものとして「ね」を感じとつてゐるのです。そして、それを食ふることによつて、齢（よ）が生（延）えて節（よ）となり、「よはひ」（年令）が感じとられてゐるのです。世も代もこの「よ」の感覚を素地としてゐることに気づかねばなりません、世と代と合わせて世代という言葉がありますが、これなども生命感覚を共有し合つた時の空間意識だということがみごとに説明されましょう。

このような個人の意識を超えた遙かな遠い遠い記憶を辿ることによつて、私どもは生命感覚が伝承されていることを知ります。

古いことが懐しく思われるのはこうした理由によるのだと思ひます。遠い近いは単に空間的距離の長短をいう言い換えではありません。記憶に刻み込まれた時間的新旧の加減によつて遠近を区別してゐるには限りません。遠いものほど生命感覚の伝承の深みに引き込まれて行くように思ひます。